

大正作家の「支那趣味」——谷崎潤一郎と芥川を軸として——

Chinese Tastes Appeared in the Writers Japanese in Taisyō-era
—Focussing on Jun'ichiro Tanizaki and Ryunosuke Akutagawa—

王 書璋
WANG Shuwei

要旨 大正作家と中国との関連を言うとき、すぐ思い浮かぶのは谷崎潤一郎、佐藤春夫、芥川龍之介、木下幸太郎などといった作家ぐらいで、その数が明治時代と比べるとずいぶん少ないが、しかし、右の作家たちはいずれも大正時代においての大家であることは事実である。これらの作家たちは大正時代において、いわゆる「支那趣味」を持つ作家たちである。「支那趣味」という言葉が生活の西洋化が進んだ大正時代に生まれたのは興味深いことである。明治維新以来、文学者を含む日本人が、社会における各分野で欧米を追う中で、これらの文学者たちは、どうして中国に関心を寄せたのだろうか。また、当時の中国はどのように彼らの眼に映ったのであろうか。そして、彼らの「支那趣味」の内実はどのようなものであろうか。本論文では、谷崎潤一郎と芥川を例にあげ、大正作家の「支那趣味」を見ていきたい。

キーワード 支那趣味 大正時代 谷崎潤一郎 芥川

一

明治時代において、幸田露伴、森鷗外、夏目漱石などの大作家たちが広く、深い漢籍の素養をもっていたことはよく知られている。しかし、近代化の進行とともに知識人の間でも「支那」を離れる傾向が始まっていたのである。大正作家と中国との関連を言うとき、すぐ思い浮かぶのは谷崎潤一郎、佐藤春夫、芥川龍之介、木下幸太郎などといった作家ぐらいで、その数が明治時代と比べるとずいぶん少ないが、右の作家たちはいずれも歴史の短い大正時代において

の大家であることは事実である。これらの作家たちは大正時代において、いわゆる「支那趣味」を持つ作家たちである。

「支那趣味」という言葉が最初に現れたのは一九二二(大正十一)年一月号の「中央公論」であった。一月号の「中央公論」に、「支那趣味の研究」というコーナーがあり、五篇の文章が並んだ。小杉未醒「唐土雜観」、佐藤功一「私の支那趣味観」、伊藤忠太「住宅から見た支那」、後藤朝太郎「支那文人と文房具」、谷崎潤一郎「支那趣味と云ふこと」という順番である。それ以来、「支那趣味」という言

葉はまたたく間に広がっていったのである。大正時代において、文壇では中国への関心が高まった背景には、西洋化されたとはいえ、まだ多くの作家たちが深い漢学素養を持っていることと、このときの日本はすでに中国本土に勢力圏を確保したため、個人の中国旅行が可能になったという二つのことがあると言える。実際、芥川、谷崎潤一郎、佐藤春夫、木下杢太郎らはいずれも当時の中国を訪ね、それぞれ中国に対して異なる思いを抱きながら、己の中国像を作品に託した。佐藤春夫はエッセーの「支那雑記」の序文の「からももの因縁」(未詳)で、自分は「支那学研究者」とは言えないまでも「支那趣味愛好者ぐらゐ」であると語る。そして、支那小説の翻案である「李太白」(大正七年)をはじめ、「自分の全著作の半分か三分の一位は支那に縁故のあることが書いてある」と書き、中国愛好者であることは明らかである。佐藤春夫は後年、芥川と一緒に漢詩を翻訳する計画を立てたが、芥川の自殺によって、共訳が実行できなかった。それでも佐藤春夫は一人で『車塵集』などの漢詩翻訳集をだした。そのほか、代表作の一つである「女誠扇綺譚」(大正十四年)や、台湾旅行の思い出をもとに書かれた「蝗の大旅行」(大正十五年)などの作品も思い起こされる。木下杢太郎の場合、実際に当時の中国に住んだこともある。大正五年、医者として、三十一歳のときに中国に渡り、南満医学堂教授兼奉天病院皮膚科部長として、満州で五年間の歳月を過ごした。「パンの会」の創立メンバーとしてモダニズムの代表者の木下杢太郎は、中国での五年間、北京をはじめとする中国各地を旅行し、中国古典や仏教美術に目を向けた。のちに永井荷風の「溼東綺譚」の挿絵を描く画家木村莊八との共著『大同石仏寺』はその成果の一つである。そのほか、中国の説話文学や怪奇

文学から、子供向きの作品を選んで訳し、『支那伝説集』にまとめている。また、『牡丹燈記』も訳している。

「支那趣味」という言葉が生活の西洋化が進んだ大正時代に生まれたのは興味深いことである。明治維新以来、文学者を含む日本人が、社会における各分野で欧米を追う中で、これらの文学者たちは、どうして中国に関心を寄せたのだろうか。また、当時の中国はどのようにに彼らの眼に映ったのだろうか。そして、彼らの「支那趣味」の内実はどのようなものであろうか。本論文では、谷崎潤一郎と芥川を例にあげ、大正作家の「支那趣味」を見ていきたい。

二

谷崎潤一郎は幼少時代から漢籍に親しんできた作家である。年譜によると、谷崎は十三歳の時に秋香塾で漢学を習っていることが分かる。「小学校にゐる時、漢学塾へ通つてゐたので、漢文のクラシックは大概その頃に読み、和文の方も大抵読んだ」と回想している。それから、坂本小学校時代の恩師稲葉清吉について、「漢文の素養は、一般に今より程度の高かつた当時としても普通の小学校の教師よりは水準を抜いていたであらふと思ふ」と言い、この稲葉から漢学の薫陶を多く受けたと思われる。このような幼年時代は成長後の谷崎にも大きな影響を及ぼしたと考えられる。幼少時代の環境が人間に与える影響について、既に七十五歳の谷崎は「私の「幼少時代」について」⁴に、次のように語る。

自分が小説作家として今日までに成し遂げた仕事は、従来考へ

てゐたよりも一層多く、自分の幼少時代の環境に負ふところがあるのではあるまいか、と云ふことである。私は今迄、自分が今あるやうな人間になつたのは、青年時代以後の学問や、経験や、社會との接觸や、諸先輩諸友人との切磋琢磨に依るのであると考へてゐたけれども、今日に至つて振り返つて見ると餘人は知らず、私の場合、現在自分が持つてゐるものゝ大部分が、案外幼少時代に既に悉く芽生えてゐたのであつて、青年時代以後に於いてほんたうに身についたものは、そんなに澤山はないやうな氣がするのである。たとへば私が、「幼少時代」に於ける小学校の「稲葉先生」などから學び取つたものは後年いろ／＼な形でさま／＼な作品の中に跡を印してゐるのであるが、それはその稲葉先生が特別優秀な先生だつたせゐでもあるが、中學以後の先生たちから受け入れたものは、それに比べればさほど著しい感化を遺してゐない。

(『谷崎潤一郎全集』第二十二卷 中央公論社 一九八三年六月)

漢学塾や稲葉から受けた感化のほか、谷崎が「支那趣味と云ふこと」において、「子供の時には漢學の塾へ通つたし、母は私に十八史略を教へたものであつた。」と書き、母からの影響も考えられる。このような影響の下で、青年期の谷崎は中国物を数多く書いた。周知の通り、谷崎は、明治四十三(一九一〇)年九月に創刊された第二次「新思潮」に同人として参加し、その「新思潮」に寄せた作品が、永井荷風の激賞を得、作家として活躍し始めた。この時、谷崎は既に中国物「麒麟」を書いていた。この作は当時の彼の漢学教養の一端を表す作品である。あらずしを次に簡単に要約する。

衛国の君主である靈公は美しい南子を得た後、たまたま町を通る孔子を見て、「天下を平げる術を授かりたい」と、孔子の一行を呼び止めた。その日から、靈公の心を左右するのは南子の言葉でなくなつて、孔子の言葉である。南子のところに来る夜もなくなつた。夫の心を支配できなくなつた南子は、靈公に「妾はあなたを直ちに孔子の掌から取り戻すことが出来ます。……妾は総べての男の魂を奪ふ術を得て居ます。妾はやがて彼の孔丘と云ふ聖人をも、妾の捕虜にして見せませう」と宣言する。南子は宣言を実行するため、孔子を宮殿に呼び寄せた。そこで、いろいろのもてなしをし、結局、孔子の一行はその翌日の朝、曹の国をさして、再び伝道の途に上つた。衛の国を去るとき、孔子が「吾未見好徳如好色者也」と言つた。この作品の素材は『論語』や『史記』から取つてゐることが言うまでもない。徳田進は「谷崎文学と中国古典との交渉——麒麟」を中心に²⁾において、「麒麟」を、「論語を横とし、これに儒教関係の著名書を織りこんで、取材、着想、想像、構成に破綻のない「麒麟」を創作したが、青年文士であつた氏にこれだけの材料が消化できて、よく谷崎文学の初期の世界を展開したのは、氏の少年時代からの漢籍による教養や中国的雰囲気への親馴と憧憬、および独創力に由るところが大きい」と評価する。

漢文に対する興味と中国への憧憬から、大正七年十月から十二月にかけて、谷崎は私費で、朝鮮、満州をへて中国大陸(北京、漢口、九江、廬山、南京、蘇州、上海、杭州)を旅行した。この旅行から、一連の中国物が生まれている。大正八年に、「美食俱樂部」(大阪朝日新聞)一月〜二月)、「蘇州日記」(『中央公論』)、「支那旅行」(『雄弁』)、「秦淮の夜」(『中外』)などの作品が、二月に発表され、「青磁

色の女（のち「西湖の月」「改造」）、「支那劇を観る記」（「中央公論」）が六月に発表され、「天鷲絨の夢」が十一月から十二月にかけて、大阪朝日新聞に連載された。また、他にも大正九年の「蘇東坡」（「改造」八月）、大正十年の「鶴唳」（「中央公論」七月）などが挙げられる。大正七年の中国旅行に、谷崎は大いに満足し、「今度は亦春にでもなつたらもう一遍支那へ行つて見ようと思つて居る」（「支那旅行」と語った。右の中国物はいずれもエキゾチックな雰囲気満ちた作品であるが、その中から、「鶴唳」を選んで、谷崎の「支那趣味」を分析していきたい。

三

「鶴唳」は、主人公兼語り手の「私」が散歩の途中、人家から離れたところに不思議な家を見つけ、その家とそこに住む、世間と隔離した人間にひかれていく物語である。三月の天気の良いある日、「私」は昼飯を済ませ、町の城址にある公園から、一帯の別荘の多い小山の方へ、ぶらぶら散歩に出かけた。道を拾いながら、西洋館だの別荘だの建物を見て、「こんな所にこんなものがあつたか知らん」と思つたところ、「私」は古ぼけた石の塀のある一軒の家を発見した。それは恐ろしく年数の経つたものらしく、今でも崩れそうな建物で、「全くこの邊の別荘とは趣が違つた」家である。しかし、「私」はさらに不思議な光景を目撃した。それは池の汀に居る一匹の鶴と、その傍にいる一人の支那服を着る少女である。「私」は庭を見回りながら、池の前に立てられた支那風の建物に目を奪われた。それは「箱根細工の組み物のやうに、全體が紫檀に似た木材で組み合わせてあ

るかと思はれる、二階建ての、非常に可愛らしい、やつと室内に人間が立てるくらゐな樓閣」である。樓閣の正面に「鎖瀾閣」と書いてある額がある。「私」はじつと石塀にしがみ付いたまま、気長に中を覗き込んでいた。そして、約三十分が経つと、黒縹子の服を着た支那人の男が出てきた。男は支那語で先の少女と何か妙な話をした。家に帰つて、「私」が今日のことを「妻」に話すと、「妻」が案外詳しく知つている。「妻」の話によると、「支那風の建物」の主人は実は日本人である。男（靖之助）は土地の素封家の息子で、「東京の帝大の文科」を出たあと、人並みに結婚したが、しかし、まもなく人間嫌い、世間嫌いになり、家に閉じこもるようになった。そして彼は前から好きだつた漢籍の世界に入つていった。彼は「支那文学」に熱中するだけでなく、身の回りの道具などもなるべく「支那製」のものにしていき、支那への憧れを強めていく。ついに、男は「支那へ行きたい」と妻に言い、家を捨てて大陸に渡つてしまった。そして、中国での七年間、「支那の女」と一緒に杭州、蘇州、鎮江、南京、成都などの、大陸を転々と巡り歩く。そして、「支那の女」と鶴を持つて、日本に戻つてきた時、もう一文無しの身であつた。「私」が見た建物は支那から材料を取り寄せて立てたものであり、少女は男の一人娘の照子である。日本に帰つてからも、靖之助は「支那の女」と一緒にいるばかりで、日本語も話さない、自分の妻のことも見ない。とうとう惨事が起こつた。父の機嫌を取るために、照子は支那服を着、支那語を話す、ついに我慢の限界が来た。照子はあの庭で「支那の女」を殺してしまつた。照子は「お母さんの敵」と言つて、彼女の喉へ、ブツリと短刀を突き刺したのである。

「鶴唳」は大正十年の七月に、「中央公論」に発表されたものであ

り、谷崎の右記のように「支那趣味」に満ちた作品である。大正十年の七月というと、大正七年の中国旅行から、三年が経とうとする頃と言える。人物設定から言うと、主人公の「私」はいつも書齋の中に立て籠もっている、世間知らずの文人である。これを見ると、読者は「私」は作家の谷崎自身であると想像するのであろう。しかし、靖之助の「東京の帝大の文科」と、漢籍好きという設定から見ると、それも谷崎を髣髴とする人物であるとも言えよう。ともかく、作中の「私」と靖之助はいずれも谷崎の分身であることが推測できる。

そして、靖之助が中国から持ってきた二つの「みやげ」（鶴と女）は、彼の「支那趣味」の内実を暴露する。鶴という動物が中国では、「仙鶴」と呼ばれ、長寿の動物として尊ばれてきたことはよく知られている。崔顥の著名な詩の「黄鶴楼」には、「仙人已乘黄鶴去、此地空余黄鹤楼」という句がある。鶴が常に仙人と一緒に連想され、仙人の乗り物とする見方も普通である。道家のシンボルとも言える存在である。植物に例えると、松に相当するのであろう。しかし、鶴は中国では稀少な動物であるため、一種の幻想的な要素がある動物でもある。「鶴唳」に出てくる池と鶴の絵はあたかも谷崎自身の憧れの「仙境」（「蘇州紀行」）のようである。

作品中の「支那の女」は揚州の生まれという。中国を旅行したとき、谷崎は中国の北より、南を好んでいる。例えば「支那旅行」（前出）において、谷崎は「其間で一番何處が面白かつたかと人に訊かれるが、何處と云つて別にないが、氣に入つたのは、南京、蘇州、上海の方面である。あの邊は北方から見ると景色も非常によいし、樹木もよく茂り、人間も綺麗であつた」と書き、南国を氣に入る理

由の一つとして、「人間が綺麗であつた」を挙げる。しかし、作中に「支那の女」は「十七八の可愛らしい支那の婦人」であることが書かれているが、その以外の描写がない。彼女に関する記述は靖之助の口から、その情報の一部が伝えられる。靖之助が妻に、「自分の為を思つてくれるなら、何卒此の女を粗略にしないでくれ、此の女が傍に居てくれれば、自分は日本に居ても支那に居られる、自分は「支那」を愛するやうに此の女を愛する、自分が憧れる「支那」の凡べては、今では此の女と鶴にあるのだ」（「鶴唳」と言う。また、本文の最後に、「彼女は、やつと照子と同じくらゐな小柄な女で、而も非常に小ひさな足を持つて居た」とのような、「支那の女」に関する情報が書かれる。

「支那の女」というと、大正八年の「秦淮の夜」（前出）のヒロインの花月樓がすぐに想起されよう。花月樓の様態について、「皮膚は茶褐色に黒ずんで居るが、肌目は飽くまでも滑らかで、黒繻子の服に包まれた四肢の骨組みは鯉のやうにしなやかなのである。日本の美人にあるやうな細面の、而も小造りな暗い顔立ては、先の女の嬌態に及ばないとしても、あの女をルビーとすれば、この女は黒曜石に似た憂鬱があつた。年は十七で、名前を花月樓と呼んで、揚州の生まれである」（「秦淮の夜」と書かれる。「鶴唳」の「支那の女」は花月樓と同じく揚州生まれで、十七八ぐらいの、小造りの女である。「秦淮の夜」の最後に、「私は纔かに彼女の名前を支那音で呼び続けつゝ、両手の間に細長い顔を抱き挟んだ。挟んで見ると掌の間にずつぽり隠れてしまふほどな小さな愛らしい顔であつた。力を籠めてぎゅつと壓したらば、壊れてしまひさうな柔らかな骨組であつた。大人のやうに整つた、赤兒のやうに生々しい目鼻立ちであると

私は思った。私は急に、挟んだ顔をいつまでも放したくないやうな、激しい情緒の胸に突き上げて来るのを覚えた」(同右)という文がある。これを読むと、「支那の女」は「いつまでも放したくない」花月樓であることが推測できる。この意味において、「鶴唳」は「秦淮の夜」の延長である。また、「一言半句も支那語を解することの出来ない私は、其の可憐なる媚びに對して、報ゆる術を知らないのが悲しかった」(「秦淮の夜」)を受けて、「鶴唳」の靖之助は中国語が出来、もう言語に対する不自由がなくなる。それに「己は一生日本語は話さない」(「鶴唳」)と言い張る。しかし、靖之助のような、日本に住んでいるのに、中国語を話す、中国の道具を用いる日本人はいったい何者であろうか。谷崎はどうしてこの人物を作り出したのであろうか。其の背景には、大正七年の中国旅行があることを看過できないのではないか。

大正七年、鉄道院の作製による旅行案内書『朝鮮満州・支那案内』が刊行された。この案内書は先行した英文東亜案内書をベースとしながら、「支那各地帝国領事館」、および「外務省通商局」から「南満州鉄道、日本郵船、東洋汽船、大阪商船、日清汽船」などの企業にいたるまで、当時の大日本帝国のアジア進出を支えていた機関の協力を得て、できるかぎり最新かつ正確な情報の集成を図った一大企画だったのである。この案内書は二週間再版、一ヶ月で三版を発行していた。当時において、定価五円の高級案内書を持って、中国に渡る日本人の数が多かったといえよう。谷崎もその中の一人である。朝鮮・満州を経て、北京から上海へと辿ったこの一回目の中国旅行は、「支那趣味」を持つ谷崎を大いに満足させた。先述した通り、谷崎は北より南を好んでいた。「蘇州紀行」に、「河上の方には

兩岸に一と叢の灌木の林があつて、水はその林の枝葉の下に隠れてしまふのであるらしい。此方から眺めると、林のあるあたりがいかに清い美しい仙境のやうに感ぜられる。お伽嚙のお爺さんやお嬢さんの住んでゐる村は、きつとあゝいふ所にあるのではないか知らん」と書き、蘇州の景色に感動している様子が窺える。また、谷崎は、絶世の美女の西施の故郷に来て、「お伽嚙のお姫様としてより外に、私は西施の事蹟を知らない。そのお姫様の故郷がつい眼の前にあるのかと思ふと、日本歴史の古蹟を訪ねる場合とは違つて、非常に遠い夢のやうに遙かであつたものが、急に近くへやつて来たやうに感ぜられる。」と、恐らく幼少時代読んだ漢籍を思い出したのだろう。そして、同時に「ほんたうに不思議な氣持がする」と告白する。

しかし、南国が谷崎を魅了したのはこのような風景だけではなく、食べ物と綺麗な女性も谷崎の心を掴んだと言える。谷崎は子供の頃から中国料理が好きであつた。「幼少時代」(前出)や多くの随筆などで、支那料理店の偕楽園主人との付き合いに関する記述がしばしば見られる。「支那の料理」⁸⁾に、「私はずっと小さい時から支那料理が好きであつた。それと云ふのは、東京の有名な支那料理屋の偕楽園の主人と子供の時から同窓で其家へよく遊びに往つて御馳走になつた」という記述が見られる。旅行中の中国料理について、「此の間支那へ行つた時も本場の支那料理を食ふと云ふ事が主な楽しみの一つとなつて居た。」(「支那の料理」)と書き、美食は中国への憧れの一つとして谷崎の脳裏にあることが分かる。さらに、北京の新豊樓でメニューを見ると、「料理の数は驚く勿れ五百種以上に上つて居る」(「支那の料理」)と驚き、「あんな複雑な料理を拵へてそれを鱈腹喰ふ國民は兎に角偉大な國民だと云ふ氣持がする。(中略)私は支那の

国民性を知るには支那料理を喰はなければ駄目だと思ふ」と告白する。中国料理への傾倒は、谷崎の「支那趣味」の特徴の一つである。美食家の谷崎は中国旅行から帰って、すぐ「美食倶楽部」(前出)を発表した。「谷崎的中国体験のエッセンスがすでに立派に移植されている」⁹⁾。「美食倶楽部」の巻頭に、「美食倶楽部の會員たちが美食を好むことは彼等が女色を好むのにも譲らなかつた」と書かれている。これはまさに谷崎自身にも言えることである。谷崎は南京の秦淮を旅行するとき、「南京一流の飯館が軒を並べて夜の更けるまで営業して居る。我々の俵は其等の一つの長松號と云ふ飯館の前でと停まつた」(「秦淮の夜」前出)と、料理屋に入ったが、紹興酒を飲みながら、「どうだね、此の河の向う岸には大分藝術家があるさうだが、別嬪が澤山居るかね」と、ガイドの中国人に尋ねる。其の答えは「え、別嬪が居ないことはありません」である。ガイドと二人が料理屋を出るとき、もう十時過ぎであつたが、「河岸通りを東へ辿つて、晝間その下を晝舫で通つた利涉橋のほとりに出る。(中略)向う河岸は狭斜の巷で、數多の妓館が参差として」いるところに辿り着いた。ここで、何軒の「妓館」を回るが、値段が高くと、女が気に入らないという原因で、なかなかいい「妓館」が見つからない。最後に辿り着いたのが「花月樓」のところであつた。この体験をベースに、「秦淮の夜」が生まれた。

大正七年の中国旅行が谷崎の「支那趣味」をますます高めるものとなつた。「鶴唳」はまさに秦淮体験への未練の産物であることが言えよう。七年間中国に居た靖之助に、娘が「支那はいゝ所ですか」と聞いたが、靖之助は「未だに消えやらぬ夢を趁ふやうな眼つきをして、「いゝ所だ、繪のやうな國だ」と答える。そして、日本に戻

つてきても、靖之助は身の回りの生活を出来るだけ中国風にして、中国女性と一緒に住み、中国語しか話さないという生活をする。彼の作つた「鎖瀾閣」はまるで桃源郷のような存在である。一見不思議で、あり得ない話であるが、その奥に潜んでいるのは作家の強烈な「支那趣味」である。「鶴唳」より約半年前に発表された「支那趣味と云ふこと」¹⁰⁾に、「嘗ては東洋の藝術を時代後れとして眼中に置かず、西歐の文物にのみ憧れてそれに心酔した人々が、或る時期が来ると結局日本趣味に復り、遂に支那趣味に趨つて行くのが、殆ど普通のやうに思はれる。特に洋行して来た人々には一層それが多いやうである」と、洋行したことのある人でも、最後に「支那趣味」に走ると言い切る。さらに、谷崎は「支那趣味に對して、故郷の山河を望むやうな不思議なあこがれを感じる」と告白したりもする。

このような、彼の「支那趣味」が極端に現れた作品である「鶴唳」に對し、野崎歓は「同時代、周囲の作家たちを押し流しつつあつた汎日本語のイデオロギーに對し、この作品は反日本語の夢を突きつける。むろん、イデオロギーへの反抗が彼の至上命令だつたわけではない。ここでもまた谷崎はただ、自らの身体と欲望とにあまりに忠実に筆を走らせているのであり、特異な思想的・政治的射程はむしろ唾然とするほど正直な願望充足の試みの結果として生じてくるにすぎない。日本が気に食わない、日本の暮らしが嫌だ。だからおれは中国人に変身するのだという無茶でひたすらエゴイスティックな男の物語、それが「鶴唳」なのである」¹¹⁾と結論付けたのである。野崎歓の見解に首肯しながらも、一つの疑問が残る。谷崎は日本で桃源郷を作り上げたにもかかわらず、最後に照子の殺人によって、その桃源郷が崩壊してしまうという問題である。この結末から、妻

と子供の幸せを犠牲にして造った桃源郷の持続が不可能となったことが分かる。この結末の必然性に、谷崎自身も自覚していると言える。それでも、谷崎はこの作品を書かずにはいられなかった。これは、その後の中国に対する谷崎の態度に関する一種の暗示だと言えるかもしれない。

実は、谷崎の、このような「支那趣味」は長く持続することが出来なかった。まさに、「桃源郷」の崩壊と言えよう。その崩壊が、ついに二回目の中国旅行の時に起きてしまうこととなったのである。大正十五年一月十三日、長崎丸で上海に旅立った。内山完造を通じて、田漢、郭沫若、歐陽予倩、周作人らとの交流も実現できた。同年二月十四日帰国の途について、今回の旅行から生まれた作品は、わずかに「上海見聞録」¹²、「上海交遊記」¹³だけである。内容から見ても、大正七年の中国旅行による豊作とは大きな差がある。谷崎は大正十五年の中国旅行について、「上海見聞録」に、「支那人の風俗なぞも、悪く西洋かぶれがして、八年前に来た時とは大分違つた印象を受けた。気に入らば上海へ一戸を構へてもいくらゐに思つてゐた私は、大いに失望して歸つた。西洋を知るには矢張り西洋へ行かなければ駄目、支那を知るには北京へ行かなければ駄目である」と書き、失望した感情を隠せなかった。右の谷崎の文を見ると、すぐに芥川の『支那遊記』を思い出すことができる。芥川は「上海遊記」¹⁴に、「上海は君の云ふ通り、兎に角一面では西洋だからね。善かれ悪かれ西洋を見るのは、面白い事に違ひないぢやないか？唯此処の西洋は本場を見ない僕の眼にも、やはり場違ひのやうな気がするのだ」と書き、谷崎の「西洋を知るには矢張り西洋へ行かなければ駄目」という主張と一致している。また、大正七年の時、谷崎が「南

の方へ来れば来る程、朝鮮や満州で金を使ったのが惜しくてならなかった」（『支那旅行』前出）と言うほど、南の方が気に入ったが、大正十五年の時、「支那を知るには北京へ行かなければ駄目である」とのように変わった。

しかし、風物に失望したにもかかわらず、谷崎の大正十五年の中国旅行は決して失敗した旅行とは言えない。その最大の収穫として、谷崎の上海文人たちとの交流が挙げられる。谷崎は大正七年以来、中国の文人と交流したかったようである。「大正七年に支那へ来た時、北京でも上海でも新しい文士作家に會ひたいと思つて、いろ／＼手蔓を求めて見たが、その時分の中華民国には、さう云ふ人は一人もなかつた」（『上海交遊記』）と無念がっている。大正十五年の旅行では、大正七年からのそうした念願が実現できた。谷崎は「上海見聞録」の冒頭で、「今度上海へ出かけて行つて一番愉快だつたことは、彼の地の若い芸術家連との交際であつた」と書く。現地の中国人芸術家との交流は谷崎の「支那趣味」のもう一つの側面を引き出した。それは彼の「支那趣味」は単に中国料理、女性、風景、或は古典中国への関心があるのみならず、現代中国の文学・芸術への関心もあることが理解できる。「上海交遊記」によると、内山書店の二階で「顔つなぎの會」があり、谷崎はそこで田漢や郭沫若らと交流したのである。その交流の内実が「上海交遊記」に書かれている。谷崎は、中国文人に関する基本情報を上海の北四川路の阿瑞里にある内山書店から獲得した。「私はそこで茶を呼ばれながら、支那青年の現状に就いて主人の語るところを聞いた」という描写からは、中国の若い世代への興味が窺える。続いて、「顔つなぎの會」で、「食卓の會話」は、やがて支那の文壇劇壇の状況に移つた。（中略）日本の作者で最

も廣く知られてゐるのは、武者小路氏と菊池氏である。(中略)田漢君が性急に領いて、「劇壇の方も矢張日本のあの時代と同じ程度にあるんです。(以下略)」と、文壇状況と劇壇状況についても話を交わしたようである。田漢や郭沫若は、谷崎の宿泊していたホテルを訪ね、自分の苦悩と悩みを谷崎に打ち明けた。

両君ともに現代支那の青年の悩みを率直に語る。われ／＼の國の古い文化は、目下西洋の文化のために次第に驅逐されつゝある。産業組織は改革され、外國の資本が流入して来て、うまい汁はみんな彼等に吸はれてしまふ。(中略)「日本と支那とは違ひます。現在の支那は獨立國ではないんです。日本は金を借りて来て自分でそれを使ふんです。われ／＼の國では外國人が勝手にやつて来て、われ／＼の利益も習慣も無視して彼等自ら此の國の地面に都會を作り、工場を建ててゐるんです。」(『谷崎潤一郎全集』第十卷)

右の文から、田漢と郭沫若の、谷崎に対する信賴が感じられる。そのような二人に対して、谷崎は「両君の言説は夜の更ける迄縷々として盡きない。私は一々尤もであると思つた。假に両君の觀察に誤つたところがあるとしても、(私はあるとは信じない)両君の胸を暗くしてゐる悩みそのものは、尊重しなければならぬものである」(『上海交遊記』)と言ひ、二人への同情を惜しまなかつた。また、旅行中、谷崎は歐陽予倩に家まで招かれて、一緒に旧曆の正月を迎えてもいる。「上海交遊記」の最後の「田漢君に送る手紙」に、田漢と一緒に歐陽家を訪ねることが書かれてゐる。谷崎は「家族の人々と楽しい年越しの夜を過したのが、いまだに忘れられない」と言ひ、

歐陽のお母さんに「此の遠くからやつて来た一人の旅人に、あなたを『お母さん』と呼びして下さい」と告白する。谷崎の、大正十五年の中国旅行をきっかけとする、中国文人たちとの交流は晩年まで続いた。昭和三十二年二月に、「心」に発表された「歐陽予倩君の長詩」から、その交流の様子が窺われる。「此の間歐陽予倩君が京劇の一行と来朝した時、私は三十年ぶりに君を箱根ホテルに迎へて久濶を叙したことであつたが、「昨夜あなたのことを詩に作つてみました」と云つて、君は萬年筆で書いた左の如き五言古詩の詩稿を示した」と書き、自分のために書いてくれた歐陽予倩の詩を紹介する。その詩は長いので、ここでの引用は省略する。ただ、本文において、谷崎が詩に関する感想などを書いてないが、「歐陽さんは箱根で別れて數日後、東京のテイトホテルに落ち着いてから、前記の詩を改めて毛筆でしたゝめて、わが／＼熱海の私のところまで届けてくれた。今雪後庵の客間にかゝつてゐる横に長い額が即ちそれである」と感激している様子は窺える。

しかし、中国文人との交流が続いていたにもかかわらず、大正十五年以後、谷崎は二度と中国に渡らなかつた。西洋かぶれの南方に対する失望からの結果であると推測できるが、しかし、現代中国の文壇への関心を抱いていた点は、注目に値する。

四

芥川も谷崎と同じく、幼少時から漢文に親しんできた作家である。養家の芥川家は、代々江戸幕府の御奥坊主をつとめた旧家で、江戸趣味の濃い家である。家族全員が文学や美術や演劇を好んで、書架

には多くの本が並んでいた。主人の道章は南画、篆刻、俳句に打ち込み、盆栽に親しむという多趣味な人間であり、また一家揃って一中節を習い、芝居を観に出かけることも珍しくなかった。このような古風な家庭環境は、芥川を同年代の子供より早く漢学に親しませた。後年に書かれた「追憶」の「草双紙」に、次のような一節がある。

僕の家の本箱には草双紙が一ぱいつまつてゐた。僕はもの心のついた頃からこれ等の草双紙を愛してゐた。殊に「西遊記」を翻案した「金比羅利生記」を愛してゐた。「金比羅利生記」の主人公は或は僕の記憶に残った第一の作中人物かも知れない。それは岩裂の神と云ふ、兜巾鈴懸けを装った、目なざしの恐しい大天狗だった。(全集第十三巻)

草双紙から、中国古典文学の名著である『西遊記』を知ったというから、その出会いはかなり早いと推測できる。成人になっても、芥川は『西遊記』をずっと愛し続けていた。「愛読書の印象」において、芥川は、「子供の時の愛読書は『西遊記』が第一である。これ等は今日でも僕の愛読書である。比喩談としてこれほどの傑作は、西洋には一つもないであらうと思ふ。名高いバンヤンの「天路歷程」なども到底この「西遊記」の敵ではない」と回想している。

また、芥川は「私の文壇に出るまで」において、「私は十位の時から、英語と漢学を習った、高等小学の三年から第三中学に入った。恰度上級には後藤末雄、久保田萬太郎の両氏が会った。私は大層おとなしかった。そして書くことは好きであつたけれども、五年の時

にただ一度学校の雑誌に『義仲論』という論文を出したきりで、将来歴史家になろうと思つていた。」と追憶しているが、実は漢学もつと早くから親しんでいたのである。岩波書店の『芥川龍之介全集』(全二十四巻)にある芥川の年譜をたどっていくと、彼が中国の古典に出会つたのは、非常に早いことが分かる。一八九九(明治三十二年)年、芥川は満七歳の時、芥川家の一中節の師匠宇治紫山の一人息子、大野勘一(当時東京府給仕。龍之介の七歳年長)について、英語と漢文と習字を勉強し始めていた。この頃のことだが、「追憶」の「学問」に書かれている。

僕は小学校へはひつた時から、この「お師匠さん」(宇治紫山 引用者注)の一人息子に英語と漢文と習字を習った。が、どれも進歩しなかつた。唯英語はTやDの発音を覚えた位である。それでも僕は夜になると、ナシヨナル・リイダアや日本外史をかかへ、せつせと相生町二丁目の「お師匠さん」の家へ通つて行つた。(全集第十三巻)

先に挙げた年譜によると、芥川が小学校に入ったのは、一八九八(明治三十一年)年の四月であつた。その翌年の七月ごろ、漢文を習い始めたという。右の引用文から、当時の様子が大体窺える。こういう経歴があるが故に、芥川が作家としてデビューした後も、中国に因縁のある作品を数多く書いたのである。これらの小説を年代順に挙げてみよう。

「酒虫」 一九一六(大正五)年六月 「新思潮」 典拠『聊齋志

- 異』卷十四「酒虫」
- 「仙人」一九一六(大正五)年八月 「新思潮」 典拠『聊齋志異』卷二「鼠戲」、卷十四「雨錢」
- 「黄梁夢」一九一七(大正六)年十月 発表誌不詳 典拠 沈既濟『枕中記』
- 「英雄の器」一九一七(大正六)年十一月? 「人文」 典拠『通俗漢楚軍談』卷十二
- 「首から落ちた話」一九一八(大正七)年一月 「新潮」 典拠『聊齋志異』卷三「諸城某甲」
- 「尾生の信」一九二〇(大正九)年一月 「中央文学」 典拠『莊子』「盜跖篇」、『史記』「蘇秦傳」など
- 「杜子春」一九二〇(大正九)年七月 「赤い鳥」 典拠 鄭還古「杜子春伝」
- 「秋山図」一九二二(大正十一年一月) 「改造」 典拠 惲南田「記秋山図之始末」(今岡次磨『東洋画論集成』上、大正四刊)
- 「奇遇」一九二二(大正十一年四月) 「中央公論」 典拠『剪燈新話』卷二「涇塘奇遇記」
- 「仙人」一九二二(大正十一年四月) 「サンデー毎日」 典拠『聊齋志異』卷一「勞山道士」
- 「女仙」一九二七(昭和二年六月) 「譚海」 典拠『女仙傳』「西河少女」

右の作品を見てわかることであるが、大正十年三月より前に書かれた作品の数のほうが多く、以後の作品が少ない。こういう傾向を説明するには、芥川の大正十年の中国旅行をまず理解しなければな

らない。

芥川が、毎日新聞の特派員として、一九二二(大正十一年)の三月下旬から七月中旬までの約四ヶ月かけて行った中国旅行は、周知の事実である。この百二十余日の間に、上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津などの地を遍歴した。日本に帰った後、「上海遊記」¹⁸⁾、「江南遊記」¹⁹⁾、「長江遊記」²⁰⁾、「北京日記抄」²¹⁾、「雜信一束」²²⁾を書き、後、これらの作品が『支那遊記』という一冊の本に収められた。右の作品から、大正十年の中国旅行は芥川にとって決して愉快な旅行ではなかったことが分かる。最初の到着地の上海を見て、芥川は「現代の支那なるものは、詩文にあるやうな支那ぢやない。猥褻な、残酷な、食意地の張つた、小説にあるやうな支那である。」(「上海遊記」八「城内」(下))という否定的な評価を下した。その次に、西湖を「泥池」(「江南遊記」)と見たり、日本人に馴染み深い「姑蘇城外寒山寺」(張繼)の寒山寺に対しても、「俗悪恐るべき建物だから、到底月落ち鳥啼くどころの騒ぎぢやない。」(「江南遊記」)と毒舌を吐いたり、「南京の基督」(大正九年)の舞台としての秦淮を、「秦淮は平凡なる溝川なり。(中略)今日の秦淮は俗臭紛紛たる柳橋なり。」(同右)と罵倒している。その次の「長江遊記」では、「私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。この国民的腐敗を目撃した後も、なお且支那を愛し得るものは、頽唐を極めたセンジユアリストとか、浅薄なる支那趣味の倘悦者であろう。」と書き、中国への嫌悪感を顕にした。ただ、今回の旅行で芥川に氣に入られたところは一つある。それは北京である。北京に到着草々、芥川は、「北京にある事三日既に北京に惚れこみ候、僕東京に住む能はざるも北京に住まば本望なり昨夜三慶園に戲を聴き帰途前門を過ぐれば

門上弦月ありその景色何とも云へず北京の壮大に比ぶれば上海の如きは蛮市のみ」と、友人宛の書簡で北京と上海を比較している。それから、書簡の「僕は毎日支那服を着ては芝居まはりをしています」と、「花合歓に風吹くところ支那服を着つつわが行く姿を思へ」という文面から、好んで中国服を着て北京市内を飛び回っている芥川の姿が想像できよう。また「僕はまた少時北京にゐる 芝居、建築、絵画、書物、芸者、料理、すべて北京が好い」というように、とにかく北京を気に入った様子が窺える。このような書簡だけではなく、「北京日記抄」でも、「上海遊記」に見える嘲笑めいた態度は一変して、北京を熱く語っている芥川が、紙面を通して伝わってくる。

芥川が北京を気に入った理由を、進藤純孝は、「どちらかと言へば、芥川自身の愛する漢詩や南画に縁のある所を探り、あるひは鬼狐の譚の舞台を確かめるといつた風のもので、かなり気儘なものである。」と評価し、青柳達雄は、「支那遊記」の中で、北京の芥川だけは生き生きとしている。(中略)支那服を着こんで毎日北京の街を「東奔西走して」いる芥川の様子が、いかにも楽しげに見えるのは政治向きの話でなく、画や書や芝居といった芸術に夢中になつてゐるからである。」と述べた。両氏は芥川の北京が好きになつた理由を、芸術への陶酔を北京から得たためと分析している。この点において、両氏の見解に同感である。後年、芥川は、「北京日記抄」を発表する直後の談話で「僕のあるいて一番好きな所といつたら北京でせうね。ふるい、いかにも悠々とした街と人、そしてあらゆるものを掩ひつくす程の青青とした樹立、あれほど調和のとれた感じのよい都はないと思ひます。」と語っている。芥川にとって、南から北への北上は、あたかも現代から過去への旅のようである。文学的に言うと、北京

を代表とする古典的な中国は、芥川文学の母胎であり、ふるさともある。現代生活に疲れた彼は過去の中で、芸術的な感激を得、大陸的な気分が癒された。当時において、恐らく、芥川は、無意識に桃源郷として中国を求めていたのではなからうか。

芥川が旅行前、書物や谷崎潤一郎の中国旅行の作品から獲得した中国像は、近代国家に入る前の、まだ昔の古色蒼然たる世界である。それこそ彼の求めていた中国であり、彼の持っている「支那趣味」の内実である。

五

以上を通じて、谷崎と芥川の「支那趣味」を見てきた。谷崎と芥川の「支那趣味」は大正期の作家の「支那趣味」を代表しているとは、直接的には言えない。だが、大正期の「支那趣味」の一端をかいま見ることの出来る例であると言える。大正期、「支那趣味」を持つ作家は、それぞれ独立の存在ではなく、常に互いに刺激しあい、「支那趣味」というネットワークを形成していたのである。谷崎潤一郎は中国旅行の時、奉天の李太郎の家に十日間ほど滞在した。二人は一緒に中華料理を食べたり、芝居を見たりした。また、佐藤春夫は、谷崎や芥川との親交が厚いのだが、これには「支那趣味」仲間という意識が働いているに違いないだろう。谷崎は佐藤の「李白」(前出)を出版社に推薦し、芥川の「南京の基督」は谷崎の「秦淮の夜」に刺激されて、創作されたことも有名な事実である。さらに言えば『上海』(一九三二)を書いた横光利一に中国旅行を勧めたのは、芥川である。そのため、大正作家の「支那趣味」はそれぞれ

の個性を保ちながらも、共通性がないわけではない。その共通点は、中国古典への回帰という点であろう。

また、作家それぞれの個性を言々と、ロマン派の谷崎に対して、理知派の芥川がいる。しかし、両者とも、富国強兵の近代日本に対するアンチテーゼとして、「古き、良き」中国に愛着を持っていたことは否定できない。

(この論文は北京科技大学冶金学院のプロジェクトYJ2010-026の中間報告である)

注

- (1) 『支那雑記』は一九四一(昭和十六)年の十月十八日に、大道書房によって刊行されたものである。菊判□十三八頁。定価三円。紙装。題字・堀口九萬一で、装幀意匠・著者。全二十二篇である。
- (2) 「幼年時代」「文藝春秋」一九五五(昭和三十)年四月號〜一九五六(昭和三十一年)年三月號。ここでは『谷崎潤一郎全集』(第十七卷 一九八二(昭和五十七)年九月)のものを使用している。
- (3) 同右
- (4) 初出は一九六一(昭和三十六)年六月の「心」である。ここでは『谷崎潤一郎全集』(一九八二(昭和五十七)年九月)第二十二卷を使用する。
- (5) 初出は一九二二(大正十一年)年一月の「中央公論」である。ここでは『谷崎潤一郎全集』(一九八二(昭和五十七)年九月)第二十二卷を使用する。
- (6) 初出は一九一〇(明治四十三年)年十二月の「新思潮」である。ここでは『谷崎潤一郎全集』(一九八二(昭和五十七)年九月)第一巻を使用している。
- (7) 『日中比較文学上の『孔子』』 ゆまに書房 一九九一(平成三)年三月二十六日
- (8) 初出、「大阪朝日新聞」一九一九(大正八)年十月。ここで『谷崎潤一郎

全集』(一九八二(昭和五十七)年九月)第二十二卷を使用する。

- (9) 『谷崎潤一郎と異国の言語』第二章「貴い大陸」の言葉―「鶴唳」野崎 歎 人文書院 二〇〇三年五月三十日
- (10) 「中央公論」一九二二年一月
- (11) 『谷崎潤一郎と異国の言語』第二章「貴い大陸」の言葉―「鶴唳」野崎 歎 人文書院 二〇〇三年五月三十日
- (12) 「文藝春秋」一九二六(大正十五)年五月
- (13) 「女性」一九二六(大正十五)年六月〜八月
- (14) 「大阪毎日新聞」一九一九(大正八)年八月十七日〜九月十二日
- (15) 一九二六(大正十五)年四月一日発行の「文芸春秋」第四号から一九二七(昭和二)年二月一日発行の同雑誌第五号第二号まで、十一回にわたって連載。岩波書店の『芥川龍之介全集』(全二十四巻全集第十三巻)にわたって連載。岩波書店の『芥川龍之介全集』(全二十四巻全集第十三巻)にわたって連載。
- (16) 「文章倶楽部」第五年第八号 一九二〇年八月一日 岩波書店『芥川龍之介全集』(全二十四巻)第六巻
- (17) 「文章倶楽部」大正六年八月一日 岩波書店『芥川龍之介全集』(全二十四巻)第二巻
- (18) 大正十年八月〜九月、大阪毎日新聞に連載
- (19) 大正十一年一月〜二月、大阪毎日新聞に連載
- (20) 「女性」一九二四(大正十三年)年九月 岩波書店『芥川龍之介全集』(全二十四巻)第十一巻
- (21) 大正十四年六月「改造」に発表
- (22) 大正十四年十一月『支那遊記』改造社刊
- (23) 大正十四年十一月、改造社刊
- (24) 一九二二年六月二十四日付 瀧井孝作宛
- (25) 一九二二(大正十)年六月二十四日付 中原虎雄宛
- (26) 一九二二(大正十)年六月二十七日推定 小穴隆一宛
- (27) 一九二二(大正十)年六月二十七日付 恒藤恭宛
- (28) 『芥川龍之介』河出書房新社 一九六四(昭和三十九)年十一月 河出書房新社
- (29) 「芥川龍之介と近代中国序説(承前)」「関東学園大学紀要」第十六号 一

- 九八八(昭和六十三)年一二月
- (30) 「旅のおもひで(長崎、北京、京都)」『東京日日新聞』一九二五年六月二十、二十一日
- (31) ここは西原大輔の『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』(二〇〇三年七月中央公論新社)を参考にして書いたものである。
- (32) 佐藤春夫は生涯三回中国に渡ったことがある。一回目の旅行から生まれた『南方紀行』を、川本三郎は『極上の機嫌』で台湾や中国の厦門をまるでユートピアであるかのように語る(『大正幻影』新潮社 一九九〇年十月)と指摘する。